

「マネジメント」の3大発明

企業経営漫談士 岡野実空

P・F・ドラッカーによって「発明」された「マネジメント」。しかしその原型は、もちろん昔から世に存在しました。因みに世界最古の企業は、西暦578年創業、大阪の「金剛組」。そこではすでに、四天王寺など官寺建築ための「経営」が行われていました。従ってドラッカーの発明品は、目的を達成するために、ヒト・モノ・カネという資源を効果的に活用する、「近代的マネジメントの体系化」に他なりません。

おかげさまで間もなく第8期に入る MCN。期末のコラムは、「マネジメント」の主要部品、カネ「複式簿記」、モノ「科学的管理法」、ヒト「分権化」を発明順に振り返り、先人たちに感謝の意を表します。

KM0-22 「マネジメント」の3大発明

発明1：複式簿記

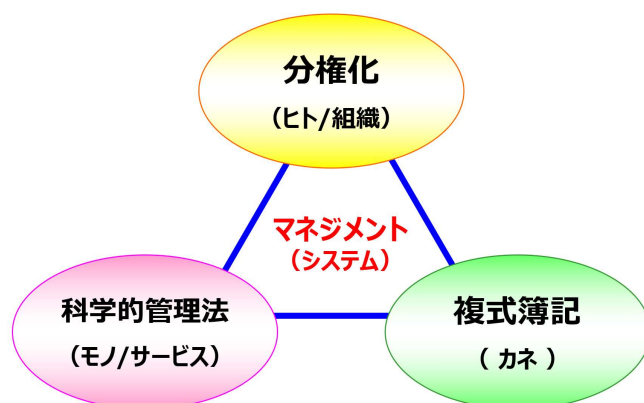
「マーケターはカネのことを考えるな！」とは、若かりし頃、先輩から言われた台詞。しかし彼も、「知らなくてよい」とは言っていない。13世紀初頭のイタリア北部都市の生まれ、ゲートをして「人智が生んだ最大の発明」とまで言わしめた「複式簿記」の目的は、もちろん信頼できる「損益計算」。記録を中心とする「簿記」が、説明を主とする「会計」に発展し、「会計学」としてさまざまな進化を続け、いまだに私たちを苦しめ？続けています。

私の場合、30代半ばに時計部門に戻り、井勘定だった高額腕時計を詳細に分析し、商品別の利益が価格帯と相反関係にあることを発見できたのは、その前の日用雑貨部門で「財務会計」の勉強をしたおかげ。また当時、まだ全く認知されていなかった「キャッシュフロー」の概念を、外部の先達から指南され、いまの職業に転じてから、その先見の明にたびたび感謝することになりました。

発明2：科学的管理法

20世紀初頭、「科学的管理法」生みの親は、F・W・テイラー。鋳物工場の現場で、労働者や原材料などの経営資源をいかに組み合わせれば生産性が高まるのかを分析し、「分業」と「協業」による劇的なコストダウンに成功しました。しかしそれを広く世に知らしめたのは、自動車のフォード。製造ラインにベルトコンベヤーを大々的に導入し、そのシステムを大きく進化させました。その功罪を映画化したチャップリンの『モダン・タイムス』の大ヒットのおかげもあり、今日では「フォード・システム」の方が広く世に知られています。

もっとも昨今の若手社員は、家庭や学校でフォードの名前を聞いたことすらないとか。いまその職場に響くのは、その起源も知らないトップたちの「生産性向上」という空しい掛け声。これぞ、21世紀の日本版『ポスト・モダン・タイムス』。



発明3：分権化

20世紀の実業家代表は？と聞けば、恐らくフォードと答える人が大多数。しかし今日の経営に与えた影響の幅を考えると、そのライバルだった GM の A・スローンの存在は大。M&A による拡大路線で経営危機に陥っていた時期に社長に就任し、部品の共通化などによって、事業部制を取りながら巧みな集権化を進め、近代的な大企業の戦略論や組織論の基礎を築きました。フォードとの立場を逆転させ、ドラッカーの研究対象ともなった彼の功績は、もっと幅広く知られるべきでしょう。

しかし、ヒト・モノ・カネ・情報という経営部品を統合し、マネジメントという暗黙知を「体系化」「見える化」したのは、なんといってもドラッカー氏の功績。その意味で、今回取り上げた3つはあくまでも「マネジメント部品」であり、氏こそ「マネジメント・システム」の発明家と言えるのです。

J・ビーティ著『マネジメントを発明した男 ドラッカー』は、いつの間にか『ドラッカーはなぜ、マネジメントを発明したのか』に改題され、同じダイヤモンド社から再発行されています。これもスローン流「計画的陳腐化」の実践事例でしょうか？

平成30年3月26日 実空